学生の主体性をサポートし、スキルアップを実現する研究会

―上級国際会計問題討論研究会―

高木正史　Masashi TAKAKI

筆者

執筆協力
国際経営学部国際経営学科３年・秦野真澄さん
国際経営学部国際経営学科３年・皆見俊貴さん

１．研究会活動と現在の会員紹介

「上級国際会計問題討論研究会」（以下，高木研究会という）は、学生に必要な基礎的英会話の習得、国際会計検定（以下、BATIC® という）のスコア・アップ、プレゼンテーション能力の向上を図るべく、週に一回、主として水曜日の午後から夕方にかけて活動を行っている。2015年度は１年生、３年生および４年生の４名の会員が活動を行ってきた。とくに2015年度では、英会話およびBATIC® に関し、学生のスキルアップが図られている。研究会では基礎的英会話の習得をまず第一の活動目標として掲げ、そのうえで各会員が個々人ごとに目標を定めたうえで、それを達成するために日々研鑽を重ねている。現在のメンバーは、杨雯韵さん（４年生、中国からの留学生）、研究室長の秦野真澄さん（３年生、大分東明高等学校卒）、皆見俊貴さん（３年生、大分東明高等学校卒、大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科からの編入生）、坂部勇人さん（１年生、府内高等学校卒）である。いずれも国際感覚豊かな英語好きな学生達である。

本稿では、研究会会員を代表して秦野さんならびに皆見さんの両名から寄せられた生の言葉を交えつつ、高木研究会の活動をご紹介していくこととする。

２．主体的に活動する学生達の原動力

高木研究会では、学生が主体的に活動を行っており、自発的な学びの場がそこにある。英語学習に関しても文法構造などを単に機械的にインプットするという無機質なものではなく、簡単な英語を用いたプレゼンが積極的に行われている。簡単な英語といえどもそれを使ってプレゼンや議論をすることは日本人学生にとって著しく難しいものであろうが、筆者も学生たちも英語（学習）をある意味肩の力を抜いて考え、「英語は言語である」「使ってこその英語」という意識のもと、実践的な英語学習が高木研究会において展開されている。時に筆者も学生と共に英語を学んでいる。むろん筆者は英語の専門家ではないが、少々の間違いなどまったく気にせず英語学習をしていくことに意義を見出している者の一人である。

研究会のリーダーである秦野さんは、高木研究会についてこう話す。

「私達の日常会話において『黙り込む』ことはそう存在しません。同様に今年度において、『とにかく英語を話すことで、英会話において沈黙を作らない』よう心がけています。そのために、はじめはテキストを使用することで多くの英語表現に触れます。会話表現だけを覚えることはしません。その後、英語によるプレゼンテーションやディスカッションを行うのですが、沈黙を作らないためには積極性が必要になります。文法も気にするようにはなってきましたが、会話という行為を成立させることに重点を置いています」。

秦野さんの英語力は確実に進歩を遂げており、研究会の活動と並行して取り組んでいるTOEIC® のスコアも徐々にアップしている。

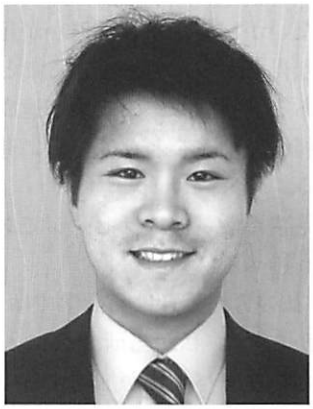
秦野真澄さん
（大分東明高等学校卒）

学生の本分とは何かということを考えた場合、それは本来主体的に勉学に励むということであろう。勉学とはそもそも自らが問題を発見する力を養うものであり、単に知識のみをインプットすればよいというものでもない。したがって、学生の主体性、学びに対するモチベーションや楽しさを惹起させるべくアドバイスを行うことが我々大学教員（もちろんこのことは大学教員に限ったことではない）には求められる。むろん、基礎的な知識をレクチャーしなければ学生は身動きが取れないかも知れないが、基礎的な知識を社会でどう応用させていくか、その意識を学生にどう持たせていくかは大学教員の重要なミッションであろう。その結果、学生は自ら新しいものを発見していく重要性と楽しさを知るであろう。高木研究会ではこのような考え方に基づいて学生の学びに対する主体性を重要視している。

３年生の皆見さんは高木研究会についてどう考えているのであろうか。皆見さんはこう語る。

「『類は友を呼ぶ』という言葉はとても分かりやすく当研究会を形容しております。当研究会、『上級国際会計問題討論研究会』には、学習において意識の高い学生が集まり、その中で互いを高め合うように競争が行われております。しかし、それでありながら仲もとてもよく、高木先生・研究会メンバーとカラオケや食事に行くなど楽しい学生生活を送っております。研究会の皆が英語を使い社会に貢献することを目標にしており、その目標を実現するために最適な場であると自負しております」。

皆見さんの勉学や大学生活に対する取り組みには目を見張るものがある。多くのことにチャレンジし、常に人との出会いを大切にしていく彼が周囲に与えているプラスの影響は計り知れないものがある。今後の高木研究会でのさらなる活躍に期待が高まる。



皆見俊貴さん
（大分東明高等学校卒、大分県立芸術文化短期大学情報コミュニケーション学科から本学へ３年次編入）

３．学生へのメッセージ

最後に秦野さんならびに皆見さんからの学生へのメッセージをご紹介したい。両名のメッセージは勉学に励む学生達に大いに参考となり得るヒントが盛り込まれていると考えられる。

まず秦野さんのメッセージからご紹介したい。秦野さんはこう話す。

「『継続は力なり』という言葉があります。これは心理面において学習にも当てはまることだと考えます。継続的に学習するようになると、精神的負荷が軽くなるのです。私も今年度はTOEIC® やBATIC® の学習に励みました。最初は学習を面倒だと感じ、何週間も学習しませんでした。しかしどうにか学習を始め、翌日もどうにか学習すると、その更に翌日から学習が楽になり、以後毎日学習するようになったのです。同じことは他の学習でも起きました。学習でお困りの方には是非、まず２日間努力して学習することをおすすめします。３日目からは大きな負荷を感じなくなるでしょう」。

勉学というものは継続してこそ意味があると筆者は考える。継続し、かつ集中して物事に取り組むスタンスがあってこそ、何かを成し遂げ得るものである。一日は24時間であり、その時間はすべての学生に対して共通するものであるが、その時間をどう利用するかということは、すべて学生にかかっている。何かを実現したくてもできないと感じている学生は、まず一日、わずかな時間、何かを学んでいただきたい。わずかな時間も継続することによって、それが大

きな時間へと変化する。その大きな時間が何かを実現する原動力となる。勉学に際して何かを成し遂げようとする場合に焦燥感を抱く場合もあろうが、その焦燥感は何かを始めると消滅していく場合が多い。要するに、何もしなければ何も起きないが、何かすれば何かが起きるであろうし知り得なかった何かを知ることが可能となるのである。勉強やその成果が達成できないことを過剰に恐れることなく、前に進むことが肝心である。

次は皆見さんからのメッセージである。皆見さんはこう述べる。

「実は、私の専門分野は会計学ではなくlogistics（物流）です。私が当研究会に入った理由は物流業もグローバル化が加速する中で実用的な英語力が必要であり、その英語力を養うのに最適な場であると考えたからです」。

さらに皆見さんはこう続ける。

「何でも構わないので何か『誰にも負けないもの』を持っていると必ずその思いに応えてくれる人、共感してくれる人がいます。学生生活でこの『誰にも負けないものを一つ』持ちましょう」。

皆見さんの言う通り、英語というものは、会計（アカウンティング）であるとか物流（ロジスティクス）といった領域を超えたところにあるグローバルに躍動する現代社会におけるコミュニケーション・ツールである。多くの外国人旅行客が来日し、この別府の地を訪れている昨今、実にさまざまな言語が飛び交っている。そのような中で英語はまさに各国で利用され得る言語である。人種・文化を超え利用され得る英語を今学ばない手はない。また、皆見さんは「誰にも負けないもの」を持つことを強調する。他人と違った考え方や他者よりも優れている何かを持つことを大学生活の目標とすることは学生にとって必要なことであろう。他人と同じ状況下において競争は生まれないであろうし、競争のない世界からは新しいものは生まれにくい。多くの高校生等が大学に進学している昨今、自ら考え、自ら行動する力が求められている。そのような「他人に勝る何か」を学生が持ち、それをプレゼンしていく能力が必要である。その能力育成に、髙木研究会が少なからず貢献しているのであれば、筆者の大きな幸せである。

※TOEIC®についての詳細は、一般財団法人、国際ビジネスコミュニケーション協会によるTOEIC®ウェブ・サイト（http://www.toeic.or.jp/）を、BATIC®についての詳細は、東京商工会議所ウェブ・サイト（http://www.kentei.org/batic/）を参照。

研究会会員（別府大学学生）の募集について

研究会会員を募集しています。学部学科不問です。まずは気軽に見学してみませんか？

詳しくは別府大学国際経営学部髙木研究室（takaki@nm.beppu-u.ac.jp）まで。